

令和 6 年 6 月 29 日現在

機関番号：82649

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01105

研究課題名(和文) 12～15世紀の中国陶磁器の流通と消費に関する調査研究—中国内外の比較研究

研究課題名(英文) The Research of Distribution and Consumption of Chinese Ceramics Between 12th and 15th Centuries : Comparative Study between China and Other Areas.

研究代表者

徳留 大輔 (TOKUDOME, DAISUKE)

公益財団法人出光美術館・その他部局等・学芸員

研究者番号：10751307

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：景德鎮窯、龍泉窯等の中国南方産陶磁器は、中国国内外に広く流通している。一方で中国国内では北宋代以降、南北各地で陶磁生産が活発化し、それらの陶磁器も流通していた。このため中国南方産陶磁器は中国国内と国外とで、流通・受容のあり方が異なることが予想される。先行研究では、中国国内と諸外国等におけるそれらの流通・受容の様相を比較した研究は多くはない。そこで、本研究では、12世紀から15世紀、中国南方産陶磁器の中国東北部や華北地域の墓地・集落・沈没船・港湾遺跡出土資料を集成し、その動向を整理し、特徴を明らかにした。またその後の伝世のあり方の比較を行うため、江戸時代の中国陶磁器の受容の特色を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界各地に流通する中国陶磁器に関して、その流通状況と中国国内外での流通と受容のあり方に、時代・地域による差異があることを明らかにした。とくに磁器を生産した地域と異なる国・地域での流通・受容に違いがあること、また後世に中国陶磁器が伝世し用いられる場合でも、各社会・文化でそれらの陶磁器の位置づけが種類や器種により異なることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Ceramics produced in southern China, such as Longquan ware, are widely distributed in and outside of China. On the other hand, since the Northern Song dynasty, Ceramics have been actively produced in the north and the south, and these ceramics were also distributed within the country. Therefore, it is expected that the distribution and acceptance of ceramics produced in Southern China differ among China and other countries. There have not been many studies comparing the distribution and acceptance of these ceramics in China with those in other countries. In this study, I collected materials of Southern Chinese ceramics produced from the 12th to 15th centuries, excavated from cemeteries, villages, shipwrecks, and harbor sites in northeastern and northern China, organized their trends, and clarified their characteristics. To compare the subsequent transmission of these ceramics, the characteristics of the reception of Chinese ceramics during the Edo period were also explained.

研究分野：東洋陶磁史、考古学

キーワード：中国陶磁器 南方産陶磁器 流通 消費 受容 伝世品

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

12世紀から15世紀は、中国国内外で景德鎮窯や龍泉窯などの中国南方産陶磁器が、広く流通した時期である。当該期は中国国内外の各国・地域でそれぞれに程度の違いはあるものの陶磁器生産が行われていた。このため中国南方産陶磁器の流通や受容のあり方は、様々な違いがあることが予想されるが、とくに中国国内の流通のあり方やその動態をもとにした比較研究は十分に進んでいない部分が少なくない。

### 2. 研究の目的

本研究では12世紀から15世紀の中国陶磁器(とくに南方産)の流通と消費の状況に関して、中国における消費地遺跡の出土状況から類型化を行い、日本における中国陶磁器の流通のあり方と比較を行うことを大きな目的としている。なお本研究期間では新型コロナウイルス感染症の拡大の影響から、日本国内ならびに海外調査が困難な時期が重なった。このため当初から行っていた当該期に関連する資料収集の成果をもとに、日本の中世後半から近世において、当該期の中国陶磁器の受容や伝世の様相についてもその一端を明らかにすることを目的として研究を行った。

### 3. 研究の方法

12世紀から15世紀に貿易陶磁を生産した景德鎮窯、龍泉窯、福建・広東諸窯などの中国南方産陶磁器について、以下の大きく3つの視点から研究を進めた。1) 中国における南方産陶磁器の消費地遺跡の動向を明らかにする。なかでもその生産地から離れた華北・東北地域の都市、集落、墓地をはじめ、港湾や沈没船などの出土資料を集成し、その流通と消費の動向を整理した。そして、重要な遺跡資料については現地での実見調査を行い、それらの陶磁器の産地の推定と製作年代について確認を行った。なお新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、中国での調査は内蒙古・遼寧省、山東省に限定して行った。また中国のその状況との比較のため、2) 日本における中国南方産陶磁器の集積地・消費地遺跡での出土品の特徴の整理を行った。とくに博多や鎌倉に注目した。また3) 少なくとも江戸時代以前に日本に舶来したと考えられる中国陶磁器については、舶来してその後どのように後世に引き継がれ、使用・評価されてきたかについての研究を進めた。出土品に加えて、文献や絵画作品、さらには日本国内の美術館・博物館に所蔵されている関連作品との比較を通して、中国陶磁器の受容とその後の展開(なかでも大名の儀礼と茶の湯の場における使用に注目)について研究を進めた。

### 4. 研究成果

12世紀から15世紀は景德鎮窯(江西省)、龍泉窯(浙江省)、福建・広東諸窯のいわゆる中国南方産の陶磁器(以下、南方産陶磁器と称す)は中国国内外に広く流通している。流通と消費の状況に関して、とくに南方産陶磁器を生産した地域から遠隔地の中国東北部・華北地域に流通したそれらの種類や出土状況・遺跡の性格の違いに着目しながらその特徴を整理し、日本をはじめとする他の国・地域のそれらの流通状況との比較を行った。それにより時代、また地域や文化・社会の違いにおける南方産陶磁器の受容、伝世のあり方に違いが生じた背景・要因について調査・研究を行った。ここでは、主に中国における12世紀から14世紀代の南方産陶磁器の消費地遺跡の動向を景德鎮窯ならびに龍泉窯を中心にまとめる。

なお中国における南方産陶磁器の消費地遺跡の動向を見ると、中国全域が統一される元・明代とそれ以前とは流通の状況に大きな違いがある。そこで本報告では12世紀から13世紀の宋(北宋:960~1127年、南宋:1127~1279年)・遼(916~1125年)・金(1125~1234年)代と、13世紀末から15世紀の元(1271~1368年)とで大きく分けて、その動向をまとめる。

#### 12世紀から13世紀頃の南方産陶磁器の遼寧・内蒙古地区における流通状況

当該地域は、10世紀中葉以降、耶律羽之等の契丹の身分の高い人物の墓地から、越州窯青磁や景德鎮青白磁の出土例が確認されている。中でも清河門M2、蕭府君墓、庫倫M1・M5、蕭徳温など11世紀中葉から12世紀第1四半期にかけては、景德鎮窯の青白磁の出土する分布域は広がりを見せ、また出土する数の増加、そしてそれまで碗・鉢や水注・温碗に偏っていたのが、香合や合子、瓶、楽器など器種も多様になっている。ただ基本的には契丹の貴族墓からの出土が主であり、出土している青白磁はいずれも精良な質のものであることから、高級品として扱われていたことが分かる。

注目されるのは、11世紀中葉以降青白磁の蓋托や斗笠蓋など茶器や薫炉なども出土していることである。これは喫茶の風習が中原地域からこの時期すでに入っており、道具も中原地域と同様のものを備えていたことが想定される。当該地で出土した南方産陶磁器の器種と副葬品の組合せから考えると、遠隔地の高品質で貴重な陶磁器としての意味だけでなく受容していたというのではなく、その機能面も重視されているという当時の生活様式や社会における習俗を反映し

ていたことを明らかにした。このことは契丹地域ではないが、いわゆる中原地域の陝西省藍田呂氏家族墓でも同様のことが言える。これらは北宋代の貴族・呂大臨一族の墓地であり、2018年に陝西省考古研究院などにより発掘報告書『藍田呂氏家族墓園(全四冊)』(文物出版社)が刊行されている。この報告を見ると、いずれも喫茶を行うための道具がセットで墓地の中に副葬されており、中原地域の北宋時代後期の貴族や士大夫層の副葬品の組成を見ると、墓主が死後も生前の生活様式を維持するために、墓地の中に各種道具を整え副葬していたことが分かる。なお当該墓地は近隣に良質な青磁などを生産していた耀州窯が所在しており、それらの製品が当該地では主に流通していたが、それでも薫炉など精緻な作りの青白磁が出土している。

この他、事例としては必ずしも多くはないが、貴族墓以外に仏教国家としても知られる契丹では、例えば遼寧省瀋陽新民遼瀆塔の塔下に設けられた地宮(1114年の紀年銘を有する石碑がともに出土、瀋陽市文物考古研究所「瀋陽新民遼瀆塔塔宮清理簡報」『文物』2006年第4期)などからは青白磁高足碗、鉢、合子などの精良な陶磁器が出土しており、このことは契丹の貴族から重宝されていた景德鎮窯青白磁が、金銀器とともに仏事における奉納される器物として重宝されていたことが指摘できる。

1125年に遼朝は金朝により滅ぼされ、内モンゴ・東北地域や華北地域の一部は金朝の領域下となる。この地域での陶磁器は遼代に焼造がはじまった缸瓦窯(内モンゴ)の製品など、地元産の製品が一般に流通していた。また金朝にとっては自身の領域の中に組み込まれることもあった定窯(河北省)の白磁や耀州窯の青磁などが墓地や都市遺跡から、また磁州窯(河北省)の製品が都市遺跡から数多く出土している。本研究における南方産陶磁器は景德鎮青白磁が、内モンゴバ林左旗林東鎮北山坡 M2 や吉林農安窖蔵や黒竜江省克東蒲峪路胡城から出土していることが確認できたが、遼代の後期に景德鎮窯青白磁の流通量が増加していた状況とは一転し、数量は極めて少ない。

12世紀から13世紀頃の南方産陶磁器の山東地区における流通状況

とくに北宋代に関しては、北宋中期の11世紀の中頃までは南方産陶磁器の流通している量が少ないことは以前指摘したことがある。その状況は山東地域における新たな考古学調査が近年続いているが、今日においても大きな変化はない。北宋中期頃から山東半島東端の沿岸部(煙台牟平北頭墓群)で青白磁の碗鉢類が確認されるが、その後、11世紀中葉から12世紀前半の北宋代末期頃の段階では、海浜部だけでなく、済南、章丘、梁山など比較的内地の都市や窖蔵、また士大夫と思われる身分の人物が埋葬されている墓地遺跡から出土している。また種類も水注、碗、壺、薫炉、合子などと増えており、先に見た遼寧や内モンゴの地区と同様な傾向にあることを明らかにした。しかし、靖康の変(1126~1127年)により山東地区が金朝の領域下にあった段階では、当該地域の遺跡からは南方産陶磁器はほぼ出土しなくなる。北宋後期の11世紀中葉以降から12世紀、金朝が成立する前の段階までは、即ち、北宋・遼の段階では、南方産の陶磁器は主に景德鎮窯青白磁を中心に、中国東北・華北地域に流通した。また多くは貴族や文人など比較的身分の高い人々の間で受容された高級な器物であった。ただし、その貴重な器物を所持する意義に加えて、喫茶の風習が中国各地、そしてそれは漢民族だけでなく契丹といった非漢民族の中で広がる中で、喫茶のための重要な器物としての機能的な側面も重視されていたのである。

ところで本研究では近年調査が進む港湾遺跡や運河・河川で確認された沈没船からの出土資料についても研究対象とした。山東地区で確認された当該期の遺跡としては、渤海湾沿岸の東營市壘利海北遺跡、東營市辛鎮遺跡などがあり、発掘調査も行われている。これによりそれらの資料の実見を地元の博物館等で行う機会を得た。それらの遺跡はいずれも華北地域の定窯系の白磁をはじめ、磁州窯やその影響を受けている地元の淄博窯(山東)、また臨汝窯(河南)の青磁などが数多く見られる中で、景德鎮窯の碗・鉢類が出土している。いずれも北宋代後期の製品である。また山東半島の南側に所在し唐宋時代の市舶司として比定される港湾遺跡の膠州板橋鎮遺跡、同じく黄海沿いに所在する日照新華村遺跡では、やはり北宋代後期の景德鎮窯の製品が出土している。ただ板橋鎮遺跡や新華村遺跡では南宋時代頃の可能性もある龍泉窯青磁や同じく12世紀から13世紀の福建省の閩江地域で作られたと思われる白磁碗が少数ながら出土している。福建産の白磁については、日本での出土・流通量と比較すると圧倒的に少量であり、またそれらの製品は定窯や景德鎮窯の白磁と比べるとかなり粗製品のものが多いことを考えると、交易のための商品ではなく、交易を行う際の実送を担った船員の持ち物であった可能性がある。

金代後期の13世紀前半頃の龍泉窯青磁と思われる製品も港湾遺跡では確認されていることから、中国の北方と南方の交易が完全に停止し、また南方産の陶磁器が流通していなかったということではないと考えるが、金朝の領域下で十分に質の面でも、機能の面でも人々の需要を満たしていたということもあり、南方産陶磁器の流通量は一時的にはあるが激減しているということを明らかにした。

14世紀代の南方産陶磁器の中国北方・東北、山東地区における流通状況

当該期は元朝の都が大都(北京)であることや、明の都も1421年に都を北京に遷したこともあり、南方産陶磁器の当該地域への流通量は増加している。都が北にあることで消費地の規模も大きくなったこと、また元代にはいると黄海を直線的に縦断する海運が発達したことも、南方産陶磁器の大量輸送と消費に繋がっていると考えられる。しかし一方で山東地区での墓地や窖蔵

などでのそれらの出土量は必ずしも増加しているわけではない。例えば山東地区では臨淄元代窖蔵から出土した龍泉窯青釉蔗節洗や濟寧甘里鋪劉大門口村石棺墓で採集された青花玉壺春瓶などが知られるが、それ以外では基本的には鈞窯、磁州窯系の白磁など在地や華北地域の陶磁器が主に流通していた。山東の荷澤市内の元代内陸運河沈没船からは景德鎮の青花梅瓶や龍泉窯の大盤などが引き上げられているが、このような器物は山東地区の都市遺跡や墓地、窖蔵などからの出土例はほとんど見られない。また華北地域の山西地区の墓地遺跡からも龍泉窯青磁や元青花の出土例は少ない。内蒙古では元時代の交通路の駅に関わる都市遺跡と目される集寧路遺跡と燕家梁遺跡では華北の磁州窯系や鈞窯系の陶磁器とともに南方産の景德鎮窯と龍泉窯の製品が大量に出土している。しかし駅と関連しないような地域や遺跡では、南方産の陶磁器は出土していない。あるいは出土していたとしても極めて少ない。このことから、南方産陶磁器は人口が集中する都市遺跡およびその周辺の墓地や窖蔵からの出土が中心ということになる。

いまのところ当該期の具体的な集積地の性格を有する遺跡を確認できなかったが、南方から運んだ陶磁器はやはり集積地を経由し、そこから大都市およびその周辺で受容、消費されていたこと、また一様に全ての階層に流通しているのではなく、とくに生産地から遠隔地になる地域では、もちろん高級な器物もあったが、碗皿などは日常的な器物ながらも高級な陶磁器として受容されていたであろうと、位置づけることができた。

#### おわりに

当該期、中国の陶磁器は国内外に広く流通していた。しかし、中国国外に輸出される陶磁器の多くは南方産であり、景德鎮窯や龍泉窯、福建・広東諸窯の製品が中心である。本研究を通して、福建・広東諸窯の製品は基本的に華北・東北へは流通していないものの、沿岸部の港湾遺跡などで出土していることを指摘した。またそれは出土する量が少ないことから現状としては、交易に関わる人々の所持品として考えた。また景德鎮窯や龍泉窯の製品については、前者は北宋期から、後者は南宋にはいり都の杭州をはじめ南方地域や国外輸出品としては広く流通するものの、華北や北方地域の流通はかなり少量であることを明らかにした。元代にはいり南方産の陶磁器の流通量が急激に増加することに関しては、商品を流通させるルートに海運が本格的に用いられること、北方地域の都市の発達とそれに伴う人口と富裕層の増加がその背景にあると考えられるが、それらは華北や北方・東北地方において一様に見られるのでないことを明らかにした。

とくに14世紀の元代以降、東西ユーラシアの交流が盛んとなる中で、陶磁器を介して、各時代の人類の交流や異なる文化・社会・自然を背景にした多様な人間社会像を復元することを可能としているといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 徳留大輔	4. 巻 28
2. 論文標題 所謂「珠光茶碗」に関する一考察－櫛描文青磁を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 出光美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 163、191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 徳留大輔	4. 巻 27
2. 論文標題 青花瓷器、所謂「雲堂手」に関する研究 - 壺（罐）類を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 出光美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 13、59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徳留大輔	4. 巻 26
2. 論文標題 （研究ノート）出光美術館所蔵のエジプトフスタート遺跡出土の唐宋時期の中国陶瓷器に関して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 出光美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 81 - 111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徳留大輔	4. 巻 256
2. 論文標題 景德鎮青花瓷器の登場 - その生産と流通	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 186 - 199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳留大輔	4. 巻 11
2. 論文標題 「陶磁の道」をさらにたどる - 山東地域に注目	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 なじまあ	6. 最初と最後の頁 4 - 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳留大輔	4. 巻 25
2. 論文標題 日本における龍泉窯青磁の受容に関する初歩的考察 - 江戸時代の事例を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 出光美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 161、191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 徳留大輔
2. 発表標題 高麗時代における中国陶磁の受容に関してー中国南方産陶磁器の特徴から
3. 学会等名 2022 International Conference on the Maritime Silk Road-remittance abroad information-National Research Institute of Maritime Cultural Heritage Cultural Heritage Administration (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 赤松佳奈・新田和央・徳留大輔・平原英俊・會澤純雄・桑静
2. 発表標題 京都出土の中国陶磁の産地推定研究
3. 学会等名 平泉文化研究センター国際シンポジウム 11～14世紀における中国陶磁の生産と流通 日本・中国の事例を中心として
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 徳留大輔・梶山博史・山田正樹
2. 発表標題 江戸時代までに伝世していた中国産青磁の集成とその特徴について
3. 学会等名 東洋陶磁学会（研究例会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 徳留大輔
2. 発表標題 出土品・伝世品の様相からみた近世期の唐物の利用に関する一考察
3. 学会等名 九州史学会考古部会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徳留大輔、村上夏希
2. 発表標題 関于出光美術館所蔵埃及福斯塔特（Fustat）遺址出土的，唐宋時期中国瓷器的幾個問題
3. 学会等名 唐宋時期的海上絲綢之路國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徳留大輔
2. 発表標題 関于龍泉青瓷的需求与流通的研究 - 日本江戸時代為主
3. 学会等名 天下龍泉 龍泉青瓷与全球化特展暨學術檢討会（國際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 羊沢林	4. 発行年 2022年
2. 出版社 海峡文芸出版社	5. 総ページ数 338
3. 書名 連江浦口窯	

1. 著者名 橋本 素子、三笠 景子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 456
3. 書名 茶の湯の歴史を問い直す	

1. 著者名 大橋康二先生喜寿記念論文集 陶磁器と考古学	4. 発行年 2023年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 528
3. 書名 大橋康二先生喜寿記念論文集 陶磁器と考古学	

1. 著者名 故宮博物院 浙江省博物館 麗水市人民政府	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文物出版社	5. 総ページ数 647
3. 書名 天下龍泉 龍泉青瓷与全球化国際学術研究会論文集	



1. 著者名 岩永省三先生退職記念事業会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中国書店	5. 総ページ数 888
3. 書名 持続する志	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	徐 波  (Xu Bo)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム 11～14世紀における中国陶磁の生産と流通 日本・中国の事例を中心として (岩手大学との共催)	開催年 2022年～2022年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------